

証 検

海外の教育

六年も勉強してなぜ喋れない?.

筑波大学大学院博士課程 サイモン・ダウンズ

ある保育園を訪ねたことがある。そこには一歳児が六人おり、一人はアメリカ人だった。私が部屋へ入ろうとすると、子供たちは驚いた顔をしてこちらを見た。一人の女の子が、ビデオテープをくわえたまま、私に何か話そうとしましたが、口にはよだれがあふれ、何を言っているのか理解出来なかった。アメリカ人の男の子が、「ハロー」と私に言った。「ハロー」と返すと、先ほどの女の子も真似して「ハロー、ハロー」と二十回以上も繰り返した。その間他の子供達は、全く無関心だった。しばらく彼らの行動を観察していて、私は面白いことに気が付いた。それは彼らには独自の共通の言葉があるということである。英語でもなければ、日本語でもない妙な言葉で、お互いをよく理解し合っていた。その言語は心理学用語で「喃語」というそうである。一般に、喃語は世界共通だと言われている。この体験から、私は会話というものは、音とジェスチャーだけである程度お互いを理解できるということを知った。

私は以前四年間英会話教師をしていた。生徒は四歳から六十五歳と様々で、まさに現在の日本社会を構成している各年齢層の人々だった。だから多少なりとも、日本人の考え方、志向性についても理解することができた。大人の生徒には、私は必ずこれまでの英語歴というものを買問した。ほとんど皆、六年以上もの時間を英語に費やし、文法・読解・英作文と十分に基礎を勉強し、さらには英検

だけで、コミュニケーションすることの楽しさを知ること。つまり、喃語の発想である。中学の入試に英語を加える訳ではない。この期間とはにかく、楽しさを教えるのである。六年間発音だけだから、かなりのレベルになることだろう。中学校では、基本的な英文法の習得を目指す。理論を教える訳なので、日本人とネイティブの先生の両方が必要である。この年齢が最も難しい時期だと思ふ。発音のみを勉強していた小学校とは異なり、理論が加わるため十分な配慮が必要である。すこし難しいと、かなりの生徒がドロップ・アウトする可能性があるため、熟練した日本人の先生が活躍する。高校卒業までには、やさしい英語で最低限の会話ができるようになることを最終目的とする。

こんなことを考えていた折、縁があって筑波大学の発達心理学教室の教授である杉原一昭先生にお会いし、私が考えていた英語教育のあり方が、イマージョンプログラムという教育方法として諸外国で研究されてきたということを教えていただいた。そして現在、このイマージョン教育法を日本で行うことを目標として、それに付随する諸問題を自分の研究テーマとして現在杉原先生のもとで研究に取り組んでいる。

イマージョン教育はコンテンツ・ベイスト教育(内容中心教授法)の一種である。コンテンツ・ベイスト教育というのは、これは、通常のカリキュラムの学習事項や学習活動を、外国語で行うことによりその言語を習得していくこととする教授法である。この中で、総授業時間の半分を超えて外国語が使用される場合をイマージョン教育と言う。世界中で既に何百万人もの児童、生徒がイマージョン教育の教室では、言語は教える対象ではなく、まさに教える手段になっている。

言語学習は、言語の正しい形を身につけるのではなく、理解しようとする、理解されようとするのが刺激

TOEIC・TOEFLなど、色々な試験に挑戦して高得点をとっている。それ程十分に英語を勉強しているのだから、かなり高度の英語ができるだろう。なのになんて彼らは英会話教室へ来る必要があるのだろうか、と考へさせられた。ある高校生の生徒は「学校の英語の授業はグラマーと訳にばかり時間を割いて、ほとんど会話の時間がない」と不平をもらした。つまり、英語でコミュニケーションすることの楽しさを知る前に、より難解な文章に辞書を片手に頭を悩ませる、ということばかりを行っているようだった。確かに、高校大学の入学試験というものが存在する以上、仕方ないことかもしれない。どこの国の人でも、新しい言語を学ぶときには、初めは皆赤ちゃんと戻ることになる。つまり、喃語の繰り返しなのである。音とジェスチャーからすべては始まる。しかし、日本人が英語を勉強するときには順番が逆で、難しい文法の勉強から始め、その後には会話へと移行する。試験などでは、まるで数学の公式に当てはめるように、単語を入れたりして、学校の授業は退屈でつまらない、と多くの生徒が嘆く。

私の考える英語教育というもの、を少しお話ししたいと思う。それは次のようなものである。まず始めに、小学校から英語の勉強を始める。一年生からである。ネイティブ教師からだけ発音の習得だけをする。文法はなしである。勉強というよりも、ネイティブと音とジェスチャーとなつて起こる(Genese,1991)。イマージョン教育の特筆すべき点は、言語と学習教育の統合(Unification of language and academic instruction)にある。教科学習の遂行や進歩が言語学習の動機を促すのである。

北アメリカで幼、小中、高の各段階で行われているイマージョン教育についての研究で、次のような結果が示されている。(Genese 1987, Strain and Larkin 1982)

- 従来の外国語教育を受けている児童、生徒より、外国語の能力が優れている。
- 算数、理科、社会等の教科でも他の児童、生徒(母国語だけで教育を受けている生徒)と同等もしくはそれ以上の学力をつけている。
- 自国の文化的アイデンティティを失うことなく、他の文化や言語を積極的に学ぶ姿勢を身につけている。
- 母国語に関しても他の児童、生徒と同程度もしくはそれ以上の学力をつけている。

静岡県にある私立加藤学園の小学校ではイマージョンプログラムが一九九二年に始まり、これは北アメリカで大きな成功をおさめているプログラムをモデルにしている。加藤学園には日本語で授業を行うクラスと、半分以上の教科が英語で教授されるイマージョンクラスとがあり、両方のクラスとも、文部省の指導要領に基づき、カリキュラムが作られている。現在、総児童数は四一五人では半数ずつの人数配分になっている。今年(一九九八)、初年度のイマージョンパイロットクラスの生徒は中学校一年生になり、中学においてもイマージョンの教育形態は続けられる予定とのことである。

戦後五十年、国際社会における日本の役割は、大きな位置を占めるようになった。換言すれば、いかにして諸外国とコミュニケーションを果たすべきか、言葉の始まりは、喃語である。難しいものではない。とにかく楽しく、赤ちゃんと戻ろう。間違ひなんて恐くない。意志の疎通ができなければ、入試の高得点は意味がない。